

幸せであるために

長崎県立豊玉高等学校

一年 松村 美乃里

「これ買ってもらったんだ。」

「高校は島外行くよ。」

「夏休みの家族旅行楽しかった。」

中学二年生ぐらいから友達の良い話や進路

に関する話を聞くと、羨ましさや自分との

違いに嫉妬心を抱くことが多くなった。

私は小学五年生の夏に父を亡くし、それか

ら母と妹と三人で暮らしている。慣れるまで

は体を心がきついこともあったが、今は大好

きなダンスや書道を習ったり、高校で最高の

仲間と学校生活を楽しんだりして幸せな日々

を送っている。だが幸せなことばかりとは言

えない。みんなが持っている服が自分も欲しい。

みんなみたいにたくさん遊びたい。周りと同

じようにできなくて、でも同じようにしたく

て、母にはたくさん負担をかけてしまっている

ことを実感している。世の中には私と同じ

思いをしていゝる人が何万人、何十万人もいる
と思う。このような体験から、私はひとり親
家庭の支援制度につけて興味を持ち始めた。
ひとり親家庭の一番の課題は経済的な困難
だと思う。両親がそろそろいる家庭の収入の
約半分ほどのお金で生活費や養育費をまかな
わなければならぬ。すると、習い事や進路
に関する教育格差、旅行や遊びに関する体験
格差が生じてくる。この格差をなくするため
国はたくさんの方の支援をしてくれている。し
かし、母子家庭、父子家庭共に支援を受けてい
る家庭はとも少ない。親一人の収入で良
い生活ができていゝる家庭は利用してないかも
しれない。支援を必要としていゝる人は日本中
のひとり親家庭の極わずかな家庭だけなのだ
ろうか。一助けて言えなくて支援を受け
られていない人はいないのだろうか。私はな
ぜ利用する人が少ないのかと考えた。すぐに
思いついたのは認知度の低さだ。保険や
子ども、高齢者の方への支援に関する広告が

テレビやスマホでよく目にするが、ひとり親
家庭の支援に関する広告は普段見かけないた
め、周りの人に教えてもらったり、自分で調
べたりしないとか知識を得ることかできない。
また、学校でも教えてもらうことがないため、
小中高生の認知度も低いと思う。ひとり親家
庭の親や子どもがそれぞれの職場や学校で安
心して過ごしていくためには、家庭内だけで
なく周りの理解が必要だ。それには、学校や
職場で講話や研修を実施したり、い之以て広
告をアッポしたりして認知度を高めていくの
が有効だと考える。

今学生の私には支援策を考え、実行する力
はない。だが、このように作文を通して人々
に伝えることはできる。もっと多くの人に知
ってもらって、支援を必要とするひとりに親家
庭の方々が幸せに楽しく過ごせる社会環境が
整うことを願っている。家庭環境を問わず、
全ての人が我慢や辛い思いをしない社会にな
りますように。